
これからもよろしく

hana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これからよろしく

【Nコード】

N8140A

【作者名】

hana

【あらすじ】

夢の中で変な夢を見たコナン。そこから悪夢は生まれた。

プロローグ（前書き）

初めて投稿する小説なので、
できが悪いと思いますが
よろしく願います。

プロローグ

ここは、どこだ？

う・眩しい。

ここは、あなたの夢の中よ。

とどこからか、声が聞こえた。

そうこれが、悪夢の始まり・・・・・・・・。

プロローグ（後書き）

前書きにも書いたとおり、できが悪いです。
なるべく友達にも見せながら投稿
したいと思うのでそれでもいいという方は
この駄目小説をよろしくお願いします。

第1話・朝の出来事！

ここは、あなたの夢の中よ。

ここから、悪夢が始まった。

朝の出来事！

「う・うん。ここは？探偵事務所か。
てことは、あれは夢だったのか。」

今しゃべっているのは毛利家に居候中の江戸川コナン。
いや、もとは、高校生探偵の工藤新一なのだが。

「コナンくん。朝ごはんよー。」

「はい。今行くー。」

コナンは朝ごはんを食べるべく、下に下りていった。

「いただきます。」

「コナン君おいしい？」

「うん！おいしいよ。」

そんなにおいしかったのか、すぐに食べ終わってしまった。

「ごちそう様でしたー。」

「はい。お粗末さまでした。あ・もうこんな時間！

早く学校に行かないと、おくれちゃうよー！」

「本当だー！」

急いで、コナンと蘭は、事務所を出た。

「コナンくん。おそいよー。」

「そうだぜ。歩美の言うとおりだぞ。コナン」

「いつも遅い元太君がいえることじゃないですよ。」

「円谷君の言うとおりだわ」

「光彦君、哀ちゃん。本当のことでも、いっていいことと、いっちょ悪いことがあるんだよ。」

「おいおい、歩美ちゃんホローになってねーぞ。」

「コナン君。何か文句あるんですか？」

「なんか光彦君キャラ違ってません？」

「そ・そんなことねーけど・・・」

「コナン君が光彦君に押されてます。笑

このような会話のなか蘭が

「早く学校行かないとおくれちゃうよー！」
といったので

「やべっ」

コナンたちは走って学校に行きました。

第1話・朝の出来事！（後書き）

ごめんなさい（><）

光彦君が光彦君がかなり壊れてしまいました！

それにコナン君もそんな光彦君に

押されまくっているし・・・。

第1話早々ギャグ的に向かっているし・・・。

こんなので、黒の組織出しても、ギャグ風で終わんないかな？
ま・次頑張ります！

第2話・・転入生?!（コナン達の会話）

転入生?!（コナン達の会

話）

帝丹小1年B組

ザワザワザワザワ

「なんかざわついてません?」

「ああ」

「あ、そういえば昨日小林先生が話してるのたまたま聞いちゃったんだけど、今日転入生が来るんだって」

「それでざわついてるのか。」

「どんな人でしょうね」

「なあ、歩美、男なのか?女なのか?」

「えーと確か男の子、1人、女の子、1人って言ってたと思うけど」

「2人もですか?!最近転入生多いですね。」

「歩美どんな奴だかわかったか?」

「ごめんね。元太君小林先生の話を聞いてただけだから、わかんないの。」

本当にすまなさそうな顔をして歩美は言った。

「あ・歩美そんな謝らなくていいって」

照れ隠しで元太は言った。

「じゃあ、名前ぐらいは、聞きましたよね?」

「あ・うん。名前は聞いたよ。」

女の子は、鈴木 早百合ちゃんススキ サユリで、

男の子は、佐竹 茂一（サタケ シゲイチ）君」

歩美は、安心なお嬉しそうに言った。

「私たちみたいな、幼児化した人だったりしてね・・・。」

哀は、コナンに聞こえる声で言った。

「そんなにいられても困るといいたいところだが、そんなこといえなくなっちまうよな」

コナンは、冷静なおおせるような口調で言った。

「え？どういう意味よ？」

「ああ、俺いや新一の時のクラスメイトに、佐竹って奴いたんだよ。」

「あら、そんなことなの？この世には同じみよじの人はたくさんいるわ。考えすぎなんじゃないの？」

冷静な口調で哀は言った。

「ああ。そうだよな。」

そして、時間は、過ぎていった。

第2話・・転入生?! (コナン達の会話) (後書き)

会話前提に進んでしまいました。

これからも、ほとんど会話前提になってしまうと思うのでご了承ください。

これからも頑張ります！

第3話・・・転入生しようかい？（前書き）

えーと今から書いても遅いと思いますが主な登場人物の紹介です！
（この設定が必ず当たるとは限りません）

江戸川コナン・・・工藤新一・・・高校生探偵として有名
だったが、江戸川コナンとなってからは、

音沙汰なし事件で死ん

でしまったとか噂が流れている。

幼なじみの毛利蘭とは、

両思いだが勇気がなく言えない。

元に戻ったら告白する

つもりらしい・・・。

灰原哀・・・宮野志保・・・元黒の組織の1員。黒
の組織でAPTX4869を作られていた。

本人は毒なんて作って

いるつもりはなかったらしい。

コードネームはシェリ

！。

姉がいたが組織に殺さ

れてしまい、親も実験で事故死してしまったらしい

今は、博士の家で居候

している。

鈴木早百合・・・相川美保・・・まだ詳しい設定は決ま
っていないが、帝丹高校元2-B。

新一と同じクラスだっ

た。そして小学校の頃からの幼なじみ

新一同様健一とともに

黒の組織を尾行していたら運悪くジン

に発見され、A P T X

4869を飲まされて、幼児化してしまった。

探偵をやっていた。そ

れとバレーが上手

佐竹茂一……佐竹健一……美保と同じく詳しい設

定は決まっていないが帝丹高校元2-B

新一と同じクラスだっ

た。そして小学校の頃からの幼なじみ

健一も美保とともに幼

児化していた。

理由は、美保とともに

行動をしていたため、美保と同じ。

健一は、美保と同じく

探偵をやっていた。それと野球も上手

吉田歩美……普通の小学生……少年探偵団に所属。

歩美曰く少年探偵団の

アイドル的存在らしい。

コナンの事が好き。好

奇心おうせい。

ある事故？でコナンた

ちの正体がわかってしまう。

小嶋元太……→に同じ……コナンのクラスメイト

少年探偵団に所属。

元太曰く少年探偵団の

団長らしい。

物。

力持ちでうな重が大好

歩美のことが好き。

ある事故？でコナンた

ちの正体がわかってしまう。

円谷光彦・・・・・・・・歩美と同じ・・・・・・・・コナンのクラスメイト

少年探偵団に所属。

光彦曰く少年探偵団の

頭脳。

歩美・哀のことが好き。

ある事故？でコナンた

ちの正体がわかってしまう。

前書き長くなりましたが、終わりです！

ガタツ

そんなコナンにきずいたのか、みんなは一斉にコナンに注目した。早百合と茂一も例外ではなくコナンの方をみた。とたんに

「え？嘘」

「し・新一の小さい頃ににてるよな?」
(幼なじみとします。)

.
[!
[

そして2人は

「しんいち?！」

早百合と茂一はコナンに向かって叫んだ。

「やっぱり美保と健一か？」

「じゃあ。やっぱり新なんだ。」

「どうしたんだよ？その格好。俺たちのクラスすっごい心配してたんだぜ？新一にしては事件解決すんの遅すぎるって」

ここが教室しかも転入生の紹介中ということも忘れ、高校の事などいろいろな話をしていた。

そんな3人に哀は呆然とみていた。

それは哀に限らず先生もクラス中のみんなにも言えることだ。
いち早く小林先生は我に戻りすかさずきいた。

「コ・コナン君たち知り合い？」

「あ・うんまあね」

「じゃ・じゃあコナン君にお願いしようかな。」

校舎案内するの。」

「あ・いえ。そんなことしなくてもいいですよ。」

「この校舎の事には詳しいので。」

「だよねー！ なんとって6年も過ぎた校舎だもん。」

「忘れるはずないよね！」

といったたん早百合と茂一とコナンの顔が青くなった。

コナンの席の隣の哀がものすごいオーラを出しているのだ。

これ以上何か言ってみなさい？どうなるかわからないわよ？
とでも言いそうなオーラーが……。

何でそんなオーラーを出されているのかわからないまま2人は哀の指示に従った。

コナンも哀の恐ろしさが1番わかつているので哀の指示に従った。

「あ・でもやつぱりたのもーかな？やつぱりおねーちゃんが通つた小学校でもわからないところはあるもんね……」

「お・俺もたのもー。」

「あ・先生僕あ・案内してくるね。」

は・灰原も連れて行きマース！灰原いくぞ！」

そして4人は教室から出て行った。

そんな光景を光彦は何かあると感じた。

「先生！僕たちも行ってきます！」

「ぼ・僕たちって？」

「少年探偵団ですよ！」

「いいわよ。行ってらっしゃい。」

「歩美ちゃん・元太くんいきますよ！」

「あ・おう！」

「わかった！」

そして少年探偵団の3人もこっそりついて行ってしまった

第3話・・・転入生しようかい？（後書き）

これから後書きにコナンの登場人物に出てもらうことにしました！
（勝手にきめんなよ！）

コナンくん

コナン（以下コ）「たっく！今から小説読もうとしてたところなのに。」

ハナ（以下ハ）「仕方ないじゃないですか！」

コ「なにがだよ！で？次はどんなストーリーだ？」

ハ「えーと。コナン達の正体が少年探偵団にばれちゃうストーリー・・・。」 ス

コ「は？どうしてそんなストーリーがでてくるんだよ！

それにほぼネタバレじゃねーか。」

ハ「私はこんなストーリーしか浮かんでこないんですうすいませんね！」 !

コ「そ・その皮肉がたまった言い方やめろ！」 +

ハ「ま・そんなこんなで、次回からはコナン＋登場人物ハナでいきます！これからもよろしく願いしま す！」

コ「（はなしそらしやがって！）よろしくおねがいしま す
！」

第4話・・・コナン達の正体。少年探偵団入部？（前半）（前書き）

コナン達のクラスに転入生がきた。

その転入生は、コナンがいや、新一のときの幼馴染だった。

第4話・・コナン達の正体。少年探偵団入部？（前半）

第4話 前半）

コナンたちの正体。少年探偵団入部？（

帝丹小裏庭

「で？ここに呼んだのは何で？新一。

それにこの子は誰なの？」

「こいつは「私は灰原哀よ。そして今までのあなた達の話聞いていてわかったわ。」

コナンの言葉を遮り哀は言った。

「え？ちよつとまって！あなたは私たちの話を盗み聞きしてたの？
趣味悪いわねー！」

早百合さんそっちですか？

「そうそう。1年生なのになんてやろうだ。」

し・茂一君もそっちですか？

「工藤君。いつもこんな感じ？」

「ああ。ついていけねーよ。」

「まあいいわ。本題に入るわよ？」

「えー？盗み聞きしてたのあやまんないの？」

「あなた達。金髪の人と、サングラスをかけた人に薬のまされたで
しょ？」

哀は早百合の言葉を無視していった。

「ええ。まあ飲まされたわ。」

早百合は哀のフインキに気づいたのか、いつの間にか探偵モードに入っていた。

「じゃあ。やっぱりあいつらの仕業か」

「あいつらって？」

のんきに早百合は言った。

「俺の中では黒の組織って呼んでるんだけど。」

俺も蘭と一緒にトロピカルランドにいったときその薬を飲まされたんだ。

そしてみての通り体が縮んだんだ。」

その話を少年探偵団の3人が聞いていた。

「か・体が縮んだ？」

「そういえば、灰原さんが転入してきたとき、コナン君がそんなこといってましたね。そのときはごまかされましたけど。」

「もう少し話聞いてみよーぜ？」

お・元太くんが珍しく冷静になっている！

「そしてこいつ灰原は……」

コナンは哀のことを指さしていった。

「いいわ。私から話すから。私はさっきも言ったとおり、灰原哀でも本名は宮野志保って言うの。」

そのとき

カサツ

と音にもならない音がなった。

コナンも早百合も茂一も探偵なのですぐに反応した。哀も反応した。

コナンたち4人は、音のした方に行ってみると、少年探偵団の3人がいた。

「お・おまえら。もしかして今の話聞いてたか？」

「「「ご・ごめんなさい。」」」

「まあ。聞いちゃったもんは、仕方ねーな。灰原いいか？」

「いいわよ。もう仕方ないじゃない。」

「健一も美保もいいか？」

「ええ。わたしはいいわよ。」

「俺も」

第4話・・・コナン達の正体。少年探偵団入部？（前半）（後書き）

hana「こんにちはー！」

コ「また俺もいるのかよ。」

hana「当たり前じゃないですか！これからコナン君は後書きのたびに出てくるんですよ！そして今回のゲストは早百合ちゃんです！」

早「いえーい！今回はゲストとして出てきました！早百合です！」

コ「で？ゲストが出てくるのはいいけど、なに話すんだ？」

hana「・・・考えてなかった。」

コ「おいおい。大丈夫かよ。こんなことで」

早「今回の小説の感想とか次回予告すればいいんじゃない？」

hana「そ・それだー！では、今回は時間がないので、また

次回もきてね？早百合ちゃん！」

早「わかった！」

hana「では、これからもこの小説をよろしくおねがいします！」

コ・早「おねがいします！」

コナン達の正体。少年探偵団入部？（後半）（前書き）

コナン達の正体が少年探偵団にばれてしまった。

コナン達の正体。少年探偵団入部？（後半）

第5話

コナンたちの正体。少年探偵団入部？（

後半）

「じゃあまず灰原から。」

「はいはい。」

私は、本名は宮野志保って言うの。

実際年齢は18歳かしら。

私は黒の組織っていう組織で、薬を開発していたわ。

その薬がAPTX4869という毒物。ここにいる私を含めた4人はその薬を飲んで幼児化したのよ。

そして私は死のうと思つて飲んだのに、幼児化してしまったわ。」
小学生には、難しくないように簡単に説明した。

「次は、健一頼む。簡単にな。」

「へいへい。わかつてるつて。」

俺は帝丹高校もと2-B」

「2-Bつて蘭お姉さんのクラスだよね？」

歩美は、光彦たちに聞いた。

「ええ。そうですね。」

「え？こいつら蘭ちゃんのことしつているのか？」

茂一は、コナンにきいた。

「ああ。今俺のいるところは蘭の家だからな。」

「あつ！そつえば前に蘭に聞いたことある！

今、小学生の子供がいるつて！

それが新一だったんだ！」

一人で納得している美保であつた。

「おいっ！話戻せ！」

「ああ。そつえばおれのことだったわけ？

2・Bってことは話しただろ。

あ・本名言ってなかった。

俺の本名は佐竹健一だ！」

「そんなこといいから、早く説明しろ！」

「新一短期だな。」

「おまえがのんびり話すから、いらついでるだけだよっ！」

「たつく。でおれがこんな体になったのは、たぶん宮野さんが入っていた組織が、密輸しているのを

美保と一緒にみて、警察に電話しようと思った矢先金髪の髪の人とサングラスをかけている男に宮野さんが作った薬を飲まされ、幼児化したつてところかな？」

「おいっ！何か大事なところ忘れてねーか？」

コナンは自分の頭を指さしながらいった。

すると新一は思い出したように付け足した。

「あ・そうそう。」

新一には負けるけど、一応おれ探偵なんだ。それと特技は野球」

「次は美保だな」

「えー！でもほとんど健一が言ってるからあまり話すことないよ！」

「それでも話せ！」

「もー！」

小百合は顔をぶんぶんさせながらいった。

「えーと私の本名は相川美保で帝丹高校もと2・B

この体になったのは健一と一緒に

んで、私も新一には負けるけど、探偵をやってマース！

特技はバレー！」

小百合の自己紹介が終わった。

「じゃ・次新一な。でも驚くだろーな。」

「仕方ねーよ。俺は江戸川コナンこと工藤新一」

「『え――――！』」

少年探偵団が驚くのも無理はない。

哀の時も多少というか驚いていたけど

今まで一緒に遊んでいた友達があの有名な工藤新一なら……。

「この姿になったのはさつき聞いていたならわかるよな？」

「はい！それなら蘭さんと一緒にトロピカルランドに行ったとき毒を飲まされ……でしたよね？」

「ああ。でもごめんな。おめえらを騙して」

「ううん。だってそれって新一お兄さんには新一お兄さんたちなりの理由があつたんですよね？」

「ああ。まあな。それと別にコナンでもかまわねえぜ。敬語も使うな。」

「で・でも」

光彦はあまり乗り気じゃないようだ

「今は、江戸川コナンだ。だからな？いいよな。灰原・美保・健一。」

「

「私はいいわよ。」

「俺も賛成だ。」

「私も！」

「はいっ！わかりました！でもこれから少年探偵団にいてくれるんですよね？」

コナン君。灰原さんも。」

「当たり前だろ？な・灰原？」

「ええ。私もそのつもりだわ。あなた達がいやじゃなければ。」

「いやな分けないよ。哀ちゃん！」

「俺もいやじゃないぜ」

「ぼくもです！」

少年探偵団の仲が深まったようだ。

しかしそのなかに首をかしげている小百合と茂一。

「ねえ少年探偵団ってなに？」

「ああ。俺たちがくんでるんだ。」

「楽しそー……………」

「小百合ちゃんも入ろうよ！茂一君も。探偵なんでしょ？」

人なつっこい歩美が聞いてきた。

「健一入る？」

「俺は入る。」

「じゃあ、わたしもはいる！」

こうして少年探偵団の人数が5人から7人に変わったのであった。

コナン達の正体。 少年探偵団入部？（後半）（後書き）

hana「こんにちは！！作者のhanaです！」

コ「こいつ今回はやけにテンション高いな。」

hana「いろいろとわけありでして・・・。」

コ「で？今回も美保がゲストとして来るんだろ？」

hana「そのはずなんですけど今日は風邪で休みなんです。」

コ「は？かつてに風邪って決め付けてんじゃねえよな？」

hana「（そのとおりです）・・・・・・。」

コ「ずばしだな？」

hana「ということで、次回の予告をしましょう。」

コ「話しそらすな！」

hana「（無視無視！）次回は海外からあの人が・・・。」

コ「ま・まで。聞いてねえ。俺はそんなこと聞いてねえぞ！」

hana「ではまた次回！」

コ「おい！」

第6話・海外からの訪問者？（前半）

第6話

海外からの訪問者？（前半）

学校帰り道

「久しぶりに博士の家行きたいなー。」

「そういや、健一と美保は中学入ってからあまりきてなかったよな
ー。」

「ああ。博士寂しそうにしてたか？」

「いや。そんなことなかったぜ？」

ガーン……。

「なんてな。すごい寂しそうに……。って健一おめえどうし
たんだ！？」

そう茂一はコナンの言ったことを間に受けてものすごい落ち込んで
いるのだ。

今は、小学生の姿なのだから、なんとか大丈夫だが（そんなことも
ないか）

高校生の姿のままだったら、変な人と思われるだろう。

「だって、博士寂しそうにしてなかったんだろ？」

「嘘だって！ものすごい寂しそうにしてたぜ？」

とコナンが言ったとたんに、茂一は目を輝かせた。

「ほ・ほんとーか？」

「ああ」

「久しぶりに博士の家いきてーな。」

「あらじゃあ来る？」

「あ・そういえば宮野さん博士の家にいるんだっけ？」

「ええ。」

「あ・俺らもいきでーよな？光彦・歩美？」

「ええ。僕たちも行きたいです！」

「歩美もー。」

「じゃ、博士の家行くか。」

「おう！でも、久しぶりに新一の家にもいきでーな。」

「お・俺ん家！？な・なんで？」

「いや、推理小説読んでーから。」

この言葉を聞いて少年探偵団の目が輝いたことは言うまでもない。そして、コナンは少年探偵団と茂一・早百合に強引に行かされたのは、言うまでもない。

ということで阿笠宅と工藤宅に行くことになったコナン達

阿笠宅

「博士ー。ただいまー。」

「博士ー。邪魔するからなー。」

「こんにちはー。」

「博士。遊びに来ましたよー。」

「俺も遊びに来たからな。」

すると奥から

「おー。みんな久しぶりじゃのう」

阿笠博士がでてきた。

「ん？そこのお2人さんはだれじゃ？」

「博士ー。もう忘れたの？私よ私。相川美保。」

「み・美保君か？じゃ・じゃあ隣にいるのは……………健一君か？」

「ピンポン。正解！博士覚えてくれたんだな。」

「で・でもどうしてそんな姿に？」

「俺と同じだ。」

「そ・そうなのか。で・でも少年探偵団のいる前でそんなこといつていいのか？」

「ああ。こいつらには、もう俺たちの正体知ってるからな。」

「へ？ということは新一だということがばれてしまったのか？」

「ああ。まあな。でな、こいつら俺んちにいきたがつてんだ。鍵くれねえか？」

「鍵がなくても入れるはずなんじゃが、鍵かかったのか？」

「へ？も・もしかしてきてんのか？あいつら。」

「そのまさかじゃよ。新一君。」

「じゃ・俺行くのよそうかな？」

「えゝ。いきましようよ。」

「私もいきたーい！」

「おれも！コナンいいだろ？」

「ああ。もういいよ！行けばいいんだろ？」

そして、コナンたち一行は工藤宅に向かっていった。

工藤宅

「本当にあいてる。はあやっぱり来てるのか・・・。」

ドアに手をかけてコナンは言った。

「早く。入ろうよ！」

「はいはい。」

もうコナン君やけになってます。＜笑＞

ガチャ

中にいた人物とは・・・。

第6話・海外からの訪問者？（前半）（後書き）

hana「皆さん。お久しぶりです！hanaです！」

コ「おいおい。ずいぶん遅い投稿だったな。それにまだあいつら出てきてねーぞ？」

hana「えーと。投稿が遅かった理由は最近忙しくて。」

コ「ほー。忙しくてね…。それより今日は美保来てんだろーな？」

hana「今日は来てますよ！では、どうぞ！！」

早「こんにちはー。やつと、来れた…。」

hana「早百合ちゃん！次は今回は出てこなかったけど、あの人たちが出てくるよ！」

コ「ほんとーに出てくんのか？」

早「もう。そういうストーリー作り始めてんのよね？」

hana「ええ！あ・そろそろ時間だから、小百合ちゃん今日はありがとうございました！」

早「いえいえ。じゃ・次回も呼んでね！」

hana「それは無理かも…。あの人たちがいるだけで時間になりそうだから。」

早「そう、わかった…。」

hana「では、次回の予告に入ります！次回は今回出てこなかったあの方たちが出てきます！では」

hana・早「さよならっ！」

そのころコナンは

コ「なんで出てくんだよ。」

落ち込んでいた。

第7話・海外からの訪問者？（後半）

海外からの訪問者？

工藤宅

バタバタバタ。

誰かの足音がする。

その足音の主とは……。

「あら。新ちゃ・じゃなくてコナンちゃん」

その声の主は、コナンだけじゃないことを確認し、言い直した。

「いいよ。母さん。こいつらにはもう正体はばれてるから。」

すると、有希子以外の声が聞こえた。

「ほう。新一お前もまだまだひよつこだな。」

「そんなんじゃないよ！ただ、話を聞かされただけだ！」

コナンは、叫びながらいった。

「でも、気配を読み取れなかったのはおまえだろ？」

「そ、そうだけど……。」

コナンは優作の言葉に、とまどいながらいった。

「ま、その話はいいとして」

「そっちから話を振ってきたんじゃないか！」

優作はコナンの言葉を無視していった。

「君たち、もしかして、健一君と美保君かい？」

「おじさま！覚えていてくれたんですね！」

「覚えるも何も、新一とは仲良くしてくれていたからね。」

「たいてい覚えているさ。でも、君たちがその姿にいるということ
は」

優作の言葉に茂一がこたえた。

「はい！俺たちも新一と同じく縮んでしまったんです。」

「そうなのか。実は、私たちがここに帰ってきたのも、黒の組織に
関連している、情報を持ってきたんだが……。」

と優作は手になにかの書類を持って、言った。

「「「「な、なんだって（ですって）！！」「」」」」

早百合と茂一とコナンと哀が急に叫んだので、少年探偵団たちは驚いた。

第7話・海外からの訪問者？（後半）（後書き）

おひさしぶりです！

ちよつと訳ありでしばらくの間更新できませんでした。

パソコンが壊れてしまったんです。

なので、これから遅れると思いますが、ご了承ください。

ってか、中途半端で終わりましたね・・・。

次回は、その情報の正体がわかります。

第8話・・・組織の情報（前書き）

少年探偵団たちとともに、コナンは工藤家へ行った。

しかしそこには、組織の情報を手に入れた、優作と有希子の姿があった。

第8話・・・組織の情報

組織の情報

「ああ。本当に組織の情報だ。」

優作は冷静に言った。

「どこで、そんな情報手に入れたんだよ？」

ここで、今まで黙っていた有希子が口を開けた。

「それは、私が女優やってたときの知り合いが、英語で書かれていた資料を、持ってきてくれたのよ。」

回想

「ねえ、有希子。なんか前に資料もらったのよ。古い親友からね。

でも、その資料英語ばかり書いてて訳わからないから、

あげるわ。」

と有希子の知り合いは言った。

「あら、これって・・・。」

回想終了

「ということで、知り合いからもらったのよ。」

有希子はさも自分が正しいというように勝ち誇ったかのように？いった。

「てか、あんま意味わかんないし・・・。そんな簡単に組織の資料が出てきてもいいのか？」

俺こんなになんばったのに、俺の努力は何だったんだよ！」

コナンは冷静さを無くし、怒ったようにいった。

と、ここで、コナンは冷静さを取り戻し、一番重要なことをいった。
「おい！もしかして・・・。その、知り合い黒の組織の連中じゃ

ねーだろーな！」

コナンは先ほどの様子とは、打って変わって真剣にいった。

「まずそれはないだろう。もし、黒の組織の連中だったら、わざわざ希子に渡さないだろうからな。」

と、優作は真剣なコナンに対して、冷静に答えた。

「だったら、その知り合いはどうして母さんにあげたんだ？もしわからなくても、その知り合いの人奴らに口止めされているはずなのに……。」

「そこが問題だな……。」

と、コナンと茂一が考え始めた。

そんなコナンたちをみているのに疲れたのか、

「おい。そんなのどうでもいいじゃねーか！用はその資料があればいいんだろ？」

「そうですね！元太君の言うとおりですよ！」

「それだったら、警察の人たちも動いてくれるんでしょ？コナン君？」

と、少年探偵団たちが口々にいった。

「……そうだな。今更こんなこと考えてても意味ないよな。もう前に突っ走っていこーぜ！新一！」

「ああ。そうするか。歩美ちゃん、元太、光彦ありがとな！」

そういつて、コナンは少年探偵団たちにお礼を言った。

「いや。お礼言われるようなことじゃねーし、大丈夫だって！」

「ぼくも、思ったことをいったまです。」

「歩美もだよ！」

歩美・元太・光彦が言った。

「じゃあ、今日はここで開きだな。」

「そうね、親子水入らずのところ悪いもの……。」

「いや、大丈夫だよ。君らも晩ご飯食べていたらどうかね？」

優作は少年探偵団の顔をみながら言った。

「そうよ！食べていつて！」

と有希子は、優作の言葉に相づちを打った。

「どうする？」

「うん。」

「ごちそうになるうぜ！」

と元太はよだれを垂らしながら、言った。

「元太君には、遠慮という言葉はないんですか？」

「……………」

妙な沈黙が流れた。

「ま、まあ。この話はここまでにして……。食べていく？ 食べていかない？」

と有希子が沈黙を破った。

「どうしようかな？」

「ま、食ってけよ。」

「新一がそういうんなら食ってこーぜ！」

ということで、少年探偵団一行は工藤家で食べていくことになった。

第8話・・・組織の情報（後書き）

パソコン買って来ました！

なので、今後は少しは早く投稿できるようになるのでは？とおもいます。

そして、やっと、今回の話はおわりました。

次は、警視庁などの人たちがでてくるかな？

so！正体ばらすんです！（↑何？

あ！ネタバレでしたね。

ま・いいや。（よくねー！）

では！また次回の出来上がりまで。

後、評価よろしく願います。

さよなら！

第9話・・決行実行日前日（平次からの電話）（前書き）

有希子の知り合いから得られた組織の情報・・・。

その情報から、コナンたちは警察に真実を打ち明けようとする・・・。

。（今回はその前日です。）

第9話・・決行実行日前日（平次からの電話）

実行決行前日（平次からの電話）

毛利探偵事務所

コナンはいつものとおり、蘭の作った朝ごはんを食べていた。いつもと違うところといえば……。

「どうしたの？コナン君。」

心配そうに蘭はコナンに聞いた。

「ん？なにが？」

「だって、いつもは笑いながら食べてるのに今日は深刻そうに食べてるんだもん。もしかして美味しく無かった？」

そう。コナンは次の日のことで、頭がいっぱいでご飯に手が届かなかったのだ。

コナンは、蘭が悲しそうな顔して聞いてくるので、あわてていった。「そ、そんなことないよ！！とっても美味しいよ！（美味しくないわけねーじゃねーか。）」

その言葉に蘭は安心したのか、笑って、

「これからも、がんばってたくさん作るからね！！」

「うん。（元の新一に戻ったときもちゃんとこいつはつくってくれるのかな？）」

そう、コナンは思ったが、首を横に振るようにして、次の瞬間にはちゃんと蘭が心配しないようにご飯を食べることに専念した。

数十分後

「『ごちそうさまでした。』」

3人そろって、ご飯を食べ終わると

小五郎はいつものように、机の上で新聞を片手に競馬を楽しんでいた。

そして蘭は、後片付けを始めた。

コナンはすることがないので、次の日のことを考えることにした。

（明日は、警察に行つてすべてを話しに行くことになってつけど、警察に奴らのスパイがいらないとは限らない。

かといって、警察の力を借りずに奴らを倒せるとはかぎらねんだよな。

つてか借りずに倒せたほうが奇跡だ……。

それに、あいつら（少年探偵団）を巻きこんじまった時点で警察に力を借りずにやるほうがどうにかしてる。

俺は、どうすればいいんだ？）

そのとき突然電話がなった。

あまりにも、突然になったためコナンの考え事は吹っ飛んでしまった。

（たつく誰だよ。こんなときに……。）

すると奥から

「ごめーん。コナンくーん。私ちよつと手が離せないから電話に出てくれる？」

と蘭の声が聞こえたので

「はい」

とコナンは返事をした。

コナンはその返事とは裏腹にだるそうに電話を取った。

ガチャ

「はい。毛利探偵事務所し「おお！工藤やないか！！お前から電話取ってくれるとは思わなかったわ。」

とコナンがいい終わらぬうちにその電話の主が話し出した。

「切るぞ……。服部。」

そう。皆さんもお気づきのとおり電話の主は西の高校生探偵服部平次だった。

その平次のハイテンションに耐えられなくなってきたのか、コナンは電話を切る素振りをした。

「ちよい、まち！くど。今電話したばかりやないか。」

平次は今にも泣きそうな声で、いった。

「だから、電話した内容を早く言えよ。」

コナンはそんな平次の態度にもひるむことなく、冷たく冷酷に平次に言い放った。

「くど。じゃあゆうけどなあ。さっき阿笠ちゅう爺さんから電話きてな。明日お前の正体や、あの組織のことを皆にバラすんやろ？」

「あ、ああ。」

コナンは何をいまさら言っただとでもいいそうなかおをして平次にいった。

「なら、なんで俺に言ってくれへんかったんや？」

いかにも、平次は怒っている。

そう。コナンは今まで組織のことにしか頭が回らなかったの、平次に電話をする暇がなかったのだ。

コナンも電話だが、声で分かったのか、

「わ、わるかったよ。後で、言おうとしてたんだ。」

「それで、電話をするの忘れてたってわけやな？」

「あ、ああ。」

コナンは言いくそうに言った。

「こっちの身にもなってみろや。そっちで、何が起きてるのかも分からんのに急にあの爺さんがこっちこいゆってたから何事かとおもったんやで？」

するとコナンは何事か急に叫んだ。

「おい！！お前もこっちにきてんのか！？」

「当たり前やんけ。今朝の飛行機でこっちにきたわ。」

「ってことは、明日お前も参加するなんていわねえよな？」

「へ？参加するに決まってるやないか。」

さも、当然のように平次は言い放った。

「……………」

「おい？工藤？どないしたんや？」

急に黙ってしまったコナンを心配したのか平次は言った。

「……………んな。」

「は？なんや？」

聞こえにくかったのか平次は聞き返した。

「明日はくんなー！」

こんどは聞こえるように怒鳴ってコナンは言い放った。

「……………」

急なことで、しばしば平次は沈黙していたが、やっと意味が分かったのか、

「なんで、行っちゃだめなんや？」

その平次の声は冷酷にも聞こえたが、怒鳴ってるようにも聞こえた。

「組織の件は俺の事件だ。お前は、入ってくんな。」

「なんやてー！俺もお前と同じ探偵なんやでー！」

「命が関わってくんだぞー！それでも、いいのかお前はー！」

コナンは今にも飛び掛りそうな感じで平次にいった。

「さっきも言ったとおり俺も探偵なんやで？もう工藤の正体知ったときから俺はその事件に巻き込まれてるんや。」

それに、工藤1人ががんばってるのに、俺だけ平然としていられるわけないやないか……………」

その平次の言葉には今の気持ちが分かるほどの言葉だった。

そんな言葉にコナンは折れたのか、

「はあ。もうしらねーからな。今の言葉忘れんじゃねーぞ。こうなったら、とことん俺に付き合ってもらうからな。」

「ああ。まかしときーや。頑張って倒そな。そしてアホトキシンゆ

う薬を取って、お前を元の体に戻すんや。」

「アホトキシンじゃなくて、APTアポトキシンXはやく覚えるよな。」

そうゆうコナンには今までの顔と違いさっきまでの迷いは消えていた。

その晩コナンはどこかに連絡をしていた。

「はい。わかりました。よろしくおねがいします。」

第9話・・決行実行日前日（平次からの電話）（後書き）

かなりおそい更新になってしまいました。

えゝ。これからがんばって、なるべくコメントを返していけるように努力したいと思います。

第10話・正体（前半）（前書き）

次の日コナン達の正体を明かすという重大な前日を迎えたコナン。しかし、そんなコナンは不安を抱えていた。そんな日に電話をしてきた平次。そして、コナンの不安はいつの間にか消えていた。

第10話・正体（前半）

次の日

コナン、平次、哀、小百合、茂一、そして博士は警視庁の前にいた。
「それにしても、あの服部平次と知り合いだったとはね。」

いつの間に仲良くなったんだよ？」

茂一は能天気聞いた。

「ちよつと。健一？これから重大な話をしにいくのよ？能気な話しないでくれる？」

ポカッ

小百合は茂一の頭を叩いた。

「おい！！美保！！人の頭ポカポカ叩くんじゃねーよ！！博士みたいにハゲたらどーすんだよ！！？」

急に博士は茂一に指差され、自分でも気にしていることをズバズバ言われ、かなり落ち込んでいた。

「ちよつと！！そんなこと言ったら博士がかわいそうじゃない！！思っても言っていない事と、悪いことがあんのよ！？そんなことぐらいいも、分からないんだつたら、探偵失格ね。」

一応小百合は博士をフォローしたようだが、フォローになっていない。それどころか、逆に落ち込ませている始末だ…。

そんな3人を遠巻きに見ている人物が3人いた。

平次、哀、コナンだ。

「・・・。ほんまに、高2なんか？」

平次は呆れた感じに言った。

「あ、ああ。一応な…。」

コナンも、平次と同じように呆れていた。

「同じ学年と思いたくないんやけど…。」

「ハハ…。」

「それより、大丈夫？時間…。確か2時って言ってなかったかしら？」

コナンは急いで時計に目をやると、時間は10分前までに迫っていた。

「ヤベッ…！」

そう、コナンは言うた茂一たちの方へと急いで駆け寄った。

そして、コナンたち一行は警視庁の中へと入っていったのだ。

コナンたちは警視庁の中にいた。コナンは、もう必要ないだろうとメガネを外した。そして、会議室へ直行したのだ。その間にコナンは目暮警部に電話をしていた。もちろん、蝶ネクタイ型変声機を片手にしながら…。

『はい。こちら捜査…。』

「あ、目暮警部。僕です。工藤新一です。」

コナンは目暮の言葉を遮り言った。

『工藤君か？』

「はい。昨日はすみません。急に電話をしてしまつて…。」

そう、この前電話をしていたのは、目暮警部だったのだ。

（第9話・決行実行日前日（平次からの電話）参考）

『あ、いや。そんなことはいいいんだよ。なんせ大事な話なんだって？ちゃんと君に言われた通り会議室を取っておいたよ。』

「はい。それで、誰がいますか？」

『あー。佐藤君と高木君と千葉君と白鳥君それに警官3人だ。』

前日の電話で言われたとおり、目暮は信頼の置ける人物を会議室に集めたのだ。そんな話をしていると、コナンたちは会議室の前につ

いた。

「あ、目暮警部。着きました。」

『おー。そうか……。では、入ってきてくれ。』

そう言われると、新一はドアをノックした。すると中から

『入ってきてくれ。』

と聞こえたので、コナンはドアノブを開けた。

「こんにちは。目暮警部。」

コナンは、その場にいた人たちに挨拶をした。子供らしからぬ不適な笑みを浮かべながら……。

会議室にいた、目暮たちは呆然としていた。

それも当然だ。今まで接していた子供だと思っていたコナンが、いつもの無邪気な微笑と違い不適な笑みを浮かべているではないか。

それに、ココに来るはずなのは工藤新一だ。決して「江戸川コナン」という少年ではないのだ。コナンが挨拶をしてから数分……？ いや、数十分？ 沈黙が流れた。この沈黙はコナンには長く感じた。いや、その場にいた全員がそう感じたはずだ。その沈黙を破ったのは……コナンだった。

「何故、僕……いや、俺がここにいいのか気になってるんですね？」

再びコナンは不適な笑みを浮かべた。よく見ると、コナンはいつもの眼鏡をかけてはいない。それにこの笑み。この口調。身近にいるではないか、ただ一人……該当人物が。だが、目暮は何も言わなかった。いや、言えなかったのだ。なんせ、その少年はこんな小学1年生ではないのだから……そんなことが起こるはずがない……と。

コナンは口を開いた。真実を言うために……。

第10話・・正体（前半）（後書き）

ごめんなさい！！

かなり、投稿が遅くなりました・・・。

実は…。この小説を入れていたUSBをなくしちゃって…。といつても、言い訳にしかありませんね・・・。

次は本当に早くできるようにしますので、これからもよろしく願います！！

追伸…約11時15分小説を修正しました。

本文自体が変わっているので、読んでください。

第11話・正体（後半）（前書き）

アハハ…皆様約1年ぶりですね。

お久しぶりです。

随分昔からこの話出来あがってたんですけど、こんな載せても大丈夫か？ってぐらい、ダメ文だったので。
んじゃ、良かったら読んでください。

第11話・正体（後半）

「目暮警部たちはお分かりかもしれませんが、俺は工藤…新一です。」

「目暮たちはその言葉を聞くと、目を見開いた。」

「コナン君が？そ、そんなはずないじゃない。」

これにはさすがに美和子も動揺していた。そんなことも見抜いていたかのようにコナン…いや新一は立っていた。しかしそんな中で一人だけ動揺していない人物がただ一人。それは…

「どうしたんですか？高木刑事？」

ただ一人だけ動揺していない人物それは…そう高木刑事だった。一瞬にしてコナン達に注がれていた視線が一気に高木刑事にそそがれる。これには高木刑事も困惑気味だ。

「いや。なんとなく薄々気付いていたから…。」

皆からの視線を受けているためなのか、少し頬を掻きながら答えた。
「え？」

そんなこと予想もしていなかったのか、少し、沈黙が流れた。

「あ、でも君が工藤くんだったことは見抜けなかったよ。僕が気付いていたことは、君が小学生じゃないってことだけ…。それは、哀ちゃんのこととも言えるけどね。哀ちゃんも小学生じゃないんだよね？」

コナンは高木刑事を甘く見すぎたと今更後悔した。一応、演技をした筈だ。自分はそんなに演技が下手なのか？いや、そんなことはないはず…。身近にいる人達には気付かれないはずなのだから…なら…。

「何故分かったんです？灰原の事まで…。」

コナンは高木刑事にもっともな質問をした。

「なんか、普通の小学生とは不陰気が違っていたからね。それに、いつも二人には異様な感じが作り出されていた。それでなんとなく、

小学生じゃないって…。」

こんなに推理ができるのであれば、事件の時にも役立てればいいのに…。コナンはそう疑問を抱いていた。

「そ、それもそうね。でも、以外だわ…。高木くんがそんなに推理できるなんて…。」

「アハハ」

高木は美和子に誉められて、嬉しそうに笑っていた。そんな様子を白鳥は面白くなさそうな感じで横目で高木を見ていた。

「オホン。」

そんな様子を見ていた目暮は咳払いを一つして口を開いた。瞬時に高木はビクツとして真剣な顔に戻った。

「えっと。よく分からのだが、君が…コナン君が工藤君だということは、分かった。しかし、何故小さくなったのだね？詳しく説明してもらわん事にはこっちも動くに動けんのだが…。」

それはそうだ。コナンは苦笑いしながら、

「はい。そのことについてこれから説明します。目暮警部ジェットコースター殺人事件（原作第1巻参考）を覚えていますか？」

と切り出した。

「あ、ああ。」

そして、コナンは全て話した。ジンやウォッカ。灰原哀のこと。小百合や茂一のこと。黒の組織のことなど包み隠さず自分のしっていることを全て。

「…というわけなんです。」

全て話終わったところには啞然としている警察郡がいた。それはそうだ。自分たち警察が知らないところでこんなことが起きていたのだ。啞然とするのは無理もない。

「ハハッ」

目暮は急に苦笑した。

「我々警察も情けないな。こんな大きな組織に気づかないなんて。」
そんな目暮の様子に誰も口が開けないでいた。

「工藤君。それで、なにかその組織の情報は入手したのかな？」

目暮はコナンに聞いた。

「はい、博士。頼む」

阿笠は急に呼ばれ驚いていたが、こくりと頷き、持っていた資料をもってコナンと目暮のほうへ行った。

「ああ。これが、組織の資料じゃ。」

阿笠は、目暮の前で資料を広げた。

「ほお。これが…。しかし、そんなものどこで？」

すると、コナンたちは苦笑した。それもそうだ。あんなに、探し求めた資料があんなに簡単に手に入れる事ができたのだから。

「えっと…。俺の両親です…。母さんの知り合いが偶然手に入れたもので…。」

「わかった。これの資料を元に作戦を立てる事にしよう。」

すると、電話が突然鳴り出した。一同は驚きながらも電話に集中した。目暮は電話の前に立ち、電話を取った。

「はい…。こちら捜査一課…。へ？あ、はい…。分かりました。よろしく願います。」

多少の挨拶をして、目暮は電話を切った。少しの緊張が走る。

「FBIからだ。黒の組織の破壊協力を頼みたいらしい。」

目暮がそう言った後、緊張が少し解れたようだ。コナンから少し余裕が見れる。

「そうですか…。」

「では、FBIと共に作戦を立てることにしよう。」

目暮は早速準備に取り掛かるように、席を立った。

「そういえば、工藤君その事は蘭ちゃんに言ったの？」

美和子は話が一段落したと悟ったのか先程の真剣な顔とは打って変わって、からかいの顔に変わっていた。

「いえ。言つつもりはありません。言うとしたら全てが終わった後

です。」

この話に敏感に反応したのは、美和子ではなく、小百合と茂一だった。

「なんでだよ？話しちゃえばいいじゃないか？蘭ちゃんに……。」

「バーロー。んなことしたら蘭が危険になっちまう。そんなことは、どうしても避けてーんだよ。この命に変えてもな……。」

コナンは遠い目をして、ボソリと呟いた。

「なんか、新一変わったね。」

そんなコナンの呟きを聞いて小百合は言った。

「そうかな？」

「ああ。確かに変わったな。」

「そうかもな……。」

コナンは半信半疑だった気持ちだが、茂一にも言われ、確信に変わった。

「そろそろ、お開きにするか。」

目暮は窓を指指した。窓の方を見てみると始めは太陽が南にあったのが、いつのまにか西に傾き始めていた。時間になるとだいたい5時ぐらいだろうか。

「そうですね。」

その意見に誰もが賛成した。

「では、明後日辺りにもう一度集まってFBIと共に作戦会議……という感じでも構わないですか？目暮警部？」

コナンは目暮に聞いた。

「ああ。構わんよ。」

こうして、会議は終わった。

そして、一人の警官は会議が終り、会議室を出るなり走って行った。そのことにコナンは疑問を抱いたが、然程気にすることもないだろう。と思い、気にもとめていなかった。しかし、その行動が後に命

取りになるとも知らず…。

「はい。ボス。シェリー達は幼児化していたらしいです。」
警官は電話が終わるなり、ニヤツと笑った。

第11話・正体（後半）（後書き）

はい。

忙しかった訳じゃないんです。

どっちかというと、年中ヒマなので（笑）

いい訳ですけど、前書きにも書いたとおり、やばかったんですよ
（笑）

文章が…それでも、かなり頑張って書いたものだけだね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8140a/>

これからもよろしく

2010年10月17日04時41分発行